

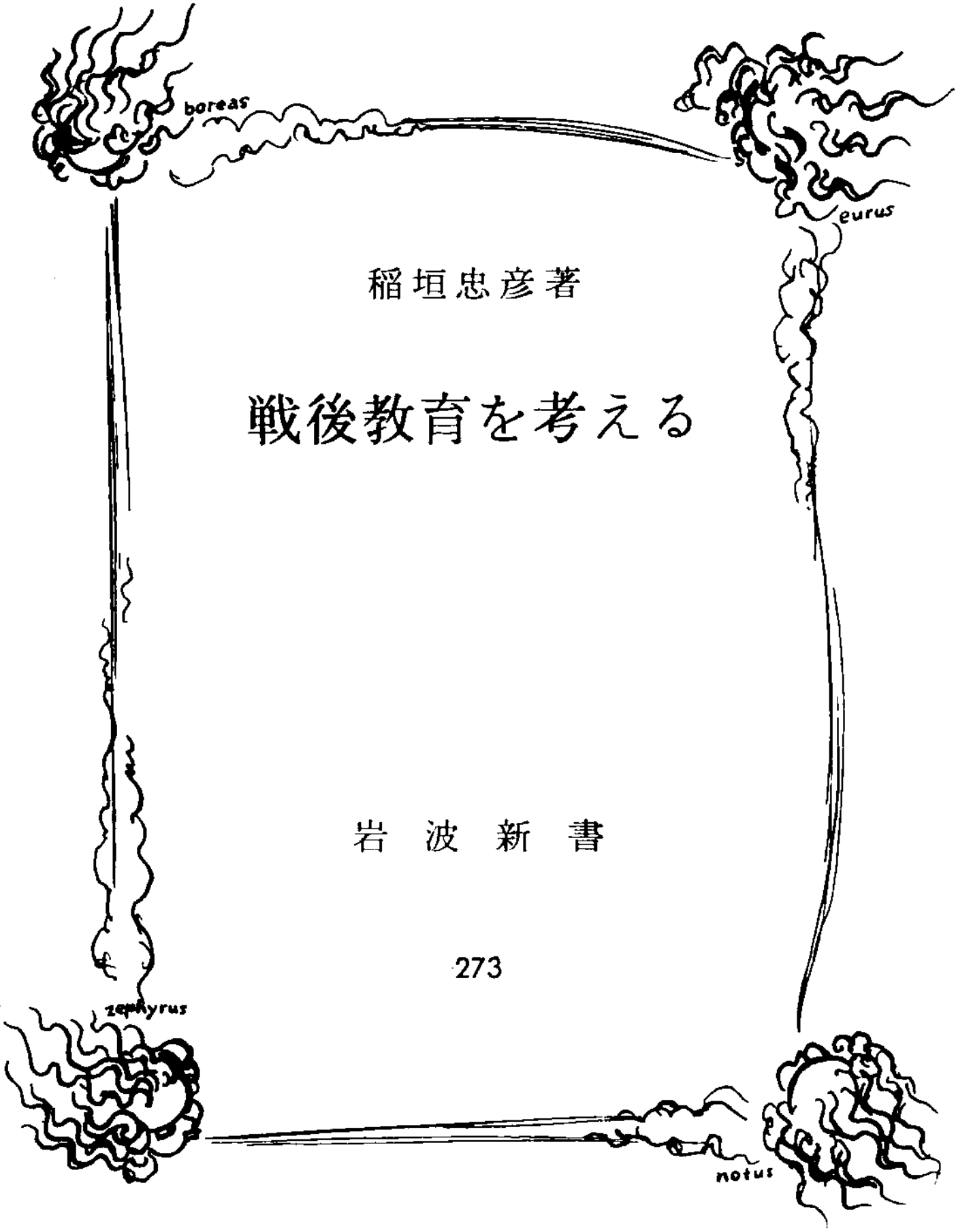
稲垣忠彦 著

戦後教育を考える



岩波新書

273



稲垣忠彦著

戦後教育を考える

岩波新書

273

稲垣忠彦

1932年広島県に生まれる

1956年東京大学教育学部卒業

専攻—教育方法史

現在—東京大学教授

著書—「明治教授理論史研究」(評論社)

「アメリカ教育通信」(評論社)

「学校を変える力」(評論社)

「戦後日本の教育改革 第6巻 教育課程 総論」(編著, 東大出版会)

「子どものための学校」(編著, 東大出版会)

UP 選書)

戦後教育を考える

岩波新書(黄版) 273

1984年8月20日 第1刷発行 ©

1986年4月20日 第3刷発行

定価 480 円

著 者 いな 稲 がき 垣 ただ 忠 ひこ 彦

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発行所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・三陽社 製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

目次

序章	1
(1) 「戦後教育」とは何か	2
(2) 外からの高い評価と内側の矛盾	7
(3) 当事者としての立場から	10
(4) 五つの問題に注目して	12
第1章 機会の平等化と質の画一化	15
(1) 機会均等と平等化	16
(2) 平等化と競争	24
(3) 狭められる学習と経験	32

(4)	平等化と画一化	39
-----	---------	----

第2章	集権的効率とその代価	45
-----	------------	----

(1)	集権的効率性	46
-----	--------	----

(2)	消去された分権	53
-----	---------	----

(3)	分権のルーツ——オバリンの場合	61
-----	-----------------	----

(4)	効率の代価	66
-----	-------	----

第3章	優秀さの吟味	71
-----	--------	----

(1)	「学力オリンピック」の成績	72
-----	---------------	----

(2)	優秀さを支えるもの	75
-----	-----------	----

(3)	学生の受験体験から	82
-----	-----------	----

(4)	粹づけられた競争	89
-----	----------	----

第4章	もう一つの優秀さ	95
-----	----------	----

(1)	対比の意味	96
(2)	もう一つの授業	98
(3)	トピックの授業と一斉授業	105
(4)	英国の大学入試	109
(5)	もう一つの優秀さ	114
(6)	授業改造の歩み——英国と日本	121
第5章 教育における公と私 ……………129		
(1)	公教育の役割	130
(2)	公と私との分離	132
(3)	オバリンでの体験	140
(4)	公と私をつなぐもの	144
第6章 混迷の中の教師 ……………149		
(1)	教師のジレンマ	150

(2)	役割とイメージの変化	153
-----	------------	-----

(3)	役割の混迷	158
-----	-------	-----

(4)	プロフェッションとしての教師	164
-----	----------------	-----

第7章	できることは何か	171
-----	----------	-----

(1)	できることは何か	172
-----	----------	-----

(2)	一人でもできること	174
-----	-----------	-----

(3)	一つの学校でもできること	179
-----	--------------	-----

(4)	学校をこえてできること	185
-----	-------------	-----

(5)	「シェラソン」への参加	191
-----	-------------	-----

版画「八郎」について(上野省策)	194
------------------	-----

あとがき	196
------	-----

序 章



八郎の立姿(135×60 cm)

(1) 「戦後教育」とは何か

「戦後教育の批判」「戦後教育の総決算」といった言葉にであうとき、そこでいう「戦後教育」とは何を指すのかという疑問がうかんでくる。

文字どおりにとれば、戦後とは一九四五年八月一五日から現在までを指している。私にとってそれは中学一年生の夏から五〇歳をこえた現在までのおよそ四〇年にわたる時間である。

中学、高校、大学、大学院、就職、結婚、子どもの誕生、そして二人の子どもが義務教育を終え、大学生、高校生となった現在までの時間であり、その時間は、敗戦、戦後の諸改革、朝鮮戦争に始まる政策の転回、安保、高度成長、石油ショック、ロッキード事件、そして経済大国への成長といった激しい変動の時代であった。国内の変動だけではない。国際的にも変化の急な時代であった。

四〇年という時間を他の時期に移すならば、ほぼ明治の全体にわたり、大正初年から始めれば、昭和二〇年代にいたる期間である。

戦後とは、このような歴史であり、戦後教育は以上の展開の中で、政治、経済、文化の変動による影響のもとで変化してきた。批判や決算の対象である戦後教育とは何を指しているのか。どの局面、どの問題をとらえているのか、あるいはその全体を指すのか。全体を指す場合にはその構造をどのようにとらえるのかが問われなければならないだろう。

戦後教育というとき、論議の主要な対象とされるのは学校教育である。学校教育が重要な制度であり、明治以降、それが国家にとって重要な教化の機関として機能してきたことは事実である。しかし、子どもは学校という閉じられた空間の中で成長するのではなく、家庭を基礎とし、社会の中で、学校を一つの場として成長する。そして、学校自体が社会の中で、多くの規制のもとに存在するのである。

戦前においては、学校が、国家の価値の浸透の強い社会の中で占めていた位置は大きく、学校の内と外との価値は連続性をもっていた。戦後において、社会や、家庭における価値は多様化し、学校における価値との距離は大きいものとなり、また、テレビ、雑誌などの影響も強くなっている。また父母の価値観、教師の価値観も変動している。今日の教育を考えると、このような変化の中で、学校をとらえ、また、子どもをとりまく場の全体にわたって検討するところがいっそう重要となるだろう。

戦後の教育をあとづける資料として学生と一九五〇年代から六〇年代初めの映画をみることがある。羽仁進の「絵を描く子どもたち」(一九五六年)と新藤兼人の「芽をふく子」(一九六二年)である。東京の江東区と群馬の農村の小学校の映画である。学生たちは、三〇年前の日本を映した映像に驚く。住まいや衣服の貧しさ、内職や農作業を手伝う子どもたち、現在と比べて、はるかに高齢にみえる労苦をきさんだ母親の表情も印象に残ることである。

子どもの遊びの場である自動車の通らない道路も今日と大きなちがいである。自動車の生産台数は四輪乗用車で一九五五年に二万台、一九八〇年には七三五万台に達している。

産業構造も大きく変わった。一九五五年と一九八〇年の比較では、第一次産業人口は、一六一万人から六〇六万人に、第二次産業人口は九二二万人から一八六二万人に、第三次産業人口は一三九三万人から三〇八六万人に変わっている。

子どもの生活時間も大きなちがいとしてあげられる。一九五五年、すでにテレビは放映されているが、その普及は〇・九パーセントである(以上の統計は『数字でみる日本の一〇〇年』国勢社による)。

当時は幼稚園を経て小学校に入学する子どもの比率も少なく、画面に登場する多くの子どもにとって、入学式は初めての団体での行動である。

このように三〇年前の映像と今日とのちがいを数えるとき、高度成長期をはさむこのような変化にもなつて、子ども、親、教師とその環境に大きな変化があることに改めて驚く。学校をつつむ社会全体の変化であり、それが学校教育を大きく規定しているのである。

戦後という場合、高度成長期をはさんでの変化は大きく、そのもたらした影響の検討は不可欠である。それは足早な変化であり、それだけに多くの矛盾を含んでいる。このような戦後における社会、経済、文化の変動と、その教育への影響は大きな研究課題であり、全体的な考察を必要とするだろう。

ところで、戦後教育の反省、批判は、決して新しいものではない。すでに、一九五〇年代において、それは政策的な問題であつたし、政治の議論としては今日まで続いている。一九五〇年代の戦後教育への批判は、朝鮮戦争以後の米国の対日政策の変化を背景として、戦後の教育改革への批判、修正として主張されたものであつた。戦後教育改革の主要な柱を、

- (1) 教育基本法にみられる教育の基本理念の転回
- (2) 教育委員会法にみられる教育行政の地方分権化
- (3) 六・三・三・四制による単線型の学校体系
- (4) 地方、学校、教師による教育内容・方法の自律的な編成と実践

としてとらえるとき、それらの修正がもめられたのであり、その方向は戦前への復帰であった。しかしその修正は、四つの柱の全面的な再改革ではない。教育基本法、六・三・三・四制という理念と制度を存続しつつ、教育の中央集権化、教育内容の規制をなくす的にすすめることによって、教育の実体を管理するという方式によって修正はすすめられた。教育課程、教科書、さらに学校、教師の管理において、戦前の構造にかえったといえるのである。

一九五〇年代における「戦後教育」とは、戦後の教育改革による変化を意味し、その批判は反改革を意味するものであり、戦前の体制への復帰を目ざすものであった。

今日の「戦後教育」批判は、政府による政策、志向という意味では、五〇年代の反改革的な批判と連続性をもっている。しかし、高度成長期を経て、今日の教育をめぐる問題状況は大きく異なっているといつてよいだろう。

先に述べた高度成長期を経ての構造的な変化のもたらす問題が、子どもと教育をめぐる今日の問題の重要な背景をなしているのである。

家族の変化、進学率の上昇、子どもの変化、より広い価値意識の変化などであり、今日論議される「戦後教育」の問題は、戦後改革と、六〇年代以降の変動の重層としてとらえることが必要であり、しかも戦後改革については、単に戦後教育改革の延長としてではなく、それが五

○年代以降の文教政策の中で理念と制度は持続しつつ、実体においてはなしくずし的に修正されたもの、その結果としてとらえることが必要である。

戦後教育とは、以上のような四〇年にわたる時間と問題のひろがりと重層性をもった対象として検討をもとめるのである。そして、その検討において、政府の文教政策もまた、今日をつくってきた主導的な要因として検討の対象となることをまねがれることはできないであろう。

(2) 外からの高い評価と内側の矛盾

国内では、今日、きびしい批判の対象とされている日本の教育は、外からは、高い評価を得ている。

ライシャワーは、『ザ・ジャパニーズ』（一九七七年）で、日本の近代化と経済的成功は高い識字率とすぐれた教育水準のたまものであり、「日本社会でなにが中枢であるといい、日本の成功になにが寄与したといつて、教育以上のものはない」と述べ、現在をも含めて、「教育こそは日本社会の、なにより決定的な特徴の一つ」であると述べている。ヴォーゲルは『ジャパン・アズ・ナンバー・ワン』（一九七九年）で、教育における質の高さと、機会均等の特徴として

あげ、カミングスは、『日本における教育と平等』（一九八〇年。邦訳名『ニッポンの学校——観察してわかったその優秀性』）で、より詳細な観察にもとづいて、日本の教育の特徴として質の高さと平等性をあげている。

日本の教育の評価において、その指標としてつねにとりあげられるのは国際教育到達度評価計画 (International Project for the Evaluation of Educational Achievement I E A と略称) による調査の成績である。一九六四年の数学、一九七〇年の理科の比較において、第三章でみるように日本は最高位に位置している。

最近の米国大統領の諮問委員会による報告『危機にたつ国家』(A Nation at Risk: The Imperative for Educational Reform) にみられるように、米国の教育に対する危機意識のふかまりにつれて、日本の教育への関心はつよまり、私たちの研究室にも同様な関心から日本の教育の調査を目的として来訪される外国の研究者がふえてきた。

米国だけではなく、中国からも、日本の教育はその近代化への貢献において見習うべきものとされている。中国の比較教育研究会常務理事・秘書長の金世柏氏は、一九八二年の日本教育学会大会での講演で、「世界近代史の上で、日本は近代化実現に最も成功した国のひとつであり、日本の教育は日本経済の急速な発展において、とりわけ重要な役割を果たした」と述べ「善

をえらんで、それに従う」という立場から、日本の経験を学びとりにきたと述べている（『教育学研究』第五〇巻第一号）。

日本の教育に対する外側からの高い評価は、われわれにとって、不快なものではない。

しかし、われわれはジャパニーズ・エデュケーション・アズ・ナンバー・ワンという評価に安んじていられるだろうか。教育をめぐる今日のかまびすしい論議の状況が示しているように、内側の矛盾や困難に、われわれが当面していることもまた事実である。

この内側の問題を、近年の二つのベストセラー、黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』と穂積隆信『積木くずし』が象徴している。それぞれ六〇〇万部、三〇〇万部に近い販売部数は、二つの本の内容が社会問題としての広がりをもっていることを示しているといつてよいだろう。

大正新教育の系譜をひくトモエ学園の実践を、著者の思い出として描いた『窓ぎわのトットちゃん』は、一種のユートピアとして、あるいはノスタルジアとして、今日の学校の対極にあるものとして読まれている。大正新教育は、都市の中産階層に支えられ、当時の定型化した学校への批判として、子どものための学校をつくった。おそらく一〇〇〇万を越す同書の読者は、学校をつくる、あるいは学校を変えろという具体的な手がかりを持ちえない今日の閉塞の中で、それをユートピアとしてとらえるのである。皮肉な表現をすれば、読者である多くの母親に

とって、この本を読むことと受験競争のために子どもを塾に通わせることが共存しているといえないか。

一方、『積木くずし』の記録は、学校、家庭、社会を含む生活の中で、今日の子そだて、子どもの成長における困難さを示している。そこに記されている問題が、いつ、どここの家庭でふきでるかもしれない身近な可能性によって、三〇〇万もの読者を得たといえるだろう。一柳展也君の不幸な両親殺人事件も、いつ、どこで顕在化するかもしれない問題のひろがりを示している。

これらの示す不満や不安は、ナンバーワンという外からの高い評価の内側の矛盾としてとらえられるのであり、両者はメダルの表裏をなしている。そして、そのような両面をもった問題として今日の教育の吟味がもとめられているのである。

(3) 当事者としての立場から

この本の目的は、私なりの戦後教育の考察である。

私なりということは、はじめに述べたように、中学一年で敗戦を迎えたいわゆる昭和一けた